

医学班 今野亜希子(京都大学)

インド・アルナーチャル・プラデーシュ州フィールド医学調査

2009年11月4日から17日にかけて、インド・アルナーチャル・プラデーシュ州の Dirang、Namshu、Melakmu、Chandar でフィールド医学調査を実施しました。

健診に来ていただいた方たちの中には、健診や医師の診断を受けるのは初めてという方も少なからずいらっしゃいました。高齢者だけでなく、小さな子供も含め、幅広い年齢層の方たちが集まってきてくれました。高齢の女性の方たちは、揃って、赤やえんじ色の地にストライプや明るい配色の柄が織り込まれた民族衣装に、装飾品を身につけていらっしゃいました。一方で、若い人達や子供たちは、私たちとそれほど変わりのない装いが多く、文化の移り変わりを目の当たりにしました。

村の子供たちはとてもシャイでしたが、好奇心が強く、窓越しや柱のかげや親の背後などから、無垢な眼差しで私たちをじっと見つめ、健診の一挙一動を目で追い続ける様子はとてもかわいらしいものでした。



写真1 健診風景

今回の健診には、移動動作能力の高い高齢者が多く集まりました。健診会場で杖を使用している人は、4地域を合わせても一人しか見かけず、椅子から立ち上がるのに苦労したり介助を必要とする人や、移動の際に壁などをつたって歩く人も見かけませんでした。

基本的日常生活機能(ADL)に関するアンケート調

査を見ても、60歳以上の高齢者で、日常生活で歩行に他人の助けが必要と回答した人(杖使用、手すり使用のもとで独力で歩ける人は、他人の助けが必要ない人とする)は62人中1人のみ、階段昇降に他人の助けが必要と回答した人(同)も62人中2人のみでした。アルナーチャルがアップダウンの厳しい地形で、段差やくぼみが多い自然のままの道が多いことから、日常的な移動に高い身体能力が求められること、勾配が大きい階段が多いことなどを考えると、この自立の割合は、私には驚きでした。健診会場に来るには移動手段が限られていることもあり、移動動作能力が高い高齢者が健診に集まったということもあると思いますが、高齢者にはきついと思われる環境で生活していることが、運動機能の維持に繋がっているの难道うかとも考えました。



写真2 日向ぼっこしながら診察待ち

診察を待つ間、日向のあちらこちらで、談笑をしたり編み物をしたりする小さな輪ができ、のどかな光景が広がりました(写真2)。アルナーチャルでは、お年寄りも、若い人も、子供も、初対面の人さえも、人々が集まる場所では、居合わせた人達がごく自然にひとつになって打ち解け合う雰囲気がありました。初めて訪れた地なのになんだか懐かしいと感じたアルナーチャルが醸し出す雰囲気は、雄大な大自然と、このような人と人との関わり合いを大切にする風土が生み出すものなのではないでしょうか。「日々の中で最も幸せを感じる瞬間は?」という質問表の問いに対し、過半数の人が、家族や親類、友人など人との関わりを挙げた

のも領けることでした。

最後になりますが、今回、アルナーチャル・フィールド医学調査の一員として、貴重な経験をさせていただきましたことを感謝申し上げます。また、アルナーチャルでお世話になった方々に御礼申し上げます。

文化班 齋藤清明(総合地球環境学研究所) ブータン印象記

昨夏、ブータンを初めて訪れた。わずかの滞在だったが、たいへん印象的だった。

まず、パロ国際空港へ。インドからの飛行機は、ガンジス河の平原からいきなり山地に入り、三〇〇〇^{メートル}級の山々を越え、山裾を縫うように飛び、谷間の耕作地帯に舞い降りる。首都のティンプーは、そこから車で約二時間。標高二四〇〇^{メートル}の川沿いにある。

ブータンはヒマラヤ山脈の東端に位置する、いわば山の国である。そこには、高地に暮らす人々がいる。七〇〇〇^{メートル}級の高山が連なる中国国境の北部山岳地帯から、南の標高二〇〇^{メートル}前後のインド国境地帯にかけて、ヒマラヤ南側の斜面にあたる国土は、日本の九州より少し広いものの、人口はわずか六十七万人ほど(二〇〇五年調査)。標高一〇〇〇~三〇〇〇^{メートル}の辺りが、伝統的なブータン人の生活空間だという。

ティンプーは同国では唯一ともいえる「都市」であり、人口は約七万人だという。小型車がけっこう走っていて、交通量が増えてきているそうだが、街の中心部でも信号機が見あたらない。まあ、穏やかなたたずまいの「町」のよう。

国立図書館を訪ね、わたしたちの高所プロジェクトで刊行した『ツォンカパ 中観哲学の研究』を謹呈し、主任研究官のソンテン博士らと歓談。館内を案内していただいた。書庫は伝統的な建物様式で、鉄筋石造りの四階建て。堂々たるものだが、驚いたことに、収蔵品のほとんどが教典である。しかも、紙の書物ではなく、経文が刻まれた版木なのだ。黄色や橙色などの鮮やかな布に巻かれた長方形の版木が、書棚にたいせつに並べられている。そして、求めに応じて刷っているようだ。

国立図書館は、チベット仏教の教典を蒐集して、この国のチベット仏教のセンター的な役割をするため作られたという。つまり、お経の「宝庫」であり、寺院でもあるのだ。その収蔵庫の奥まで案内していただき、国内の各地から蒐集中の古い経典を拝見。まさに国宝級のものであった。

ブータンは、チベット仏教を国教としている。仏教国といわれる国は他にもあるが、国教としているのは、現在ではおそらく他に例がないだろう。たとえば、国や地方行政の役所と僧院が一つの城郭の中にある「ゾン」。首都はじめ国内の主要な地であって、よく目立つ。まさにそびえていて、政治と宗教が表裏一体となっている象徴のようにおもわれた。ティンプーのタシチョ・ゾンは、この国の政治と宗教の中心となっている。この他、パロ・ゾンなども、外国人の観光客も訪れることができるが、寺の中までには入れず、外からながめるだけ。神聖な場所なのだ。

ティンプーの街中に、ひとときわ高く、白亜の仏塔がそびえている。第三代国王を偲んで一九七四年に建てられた、メモリアル・チョルテンである。境内に入ると、朝早くから、仏塔の周りを大勢の人々が、マニ車を回しながら、右回りに巡っている。ここに集う老若男女の熱心な信仰心。チベット仏教のシンボルとされるラサのジョカン寺を何回も訪れているが、その熱気を彷彿させた。

パロにある国立博物館の館長ケンポ師と夕食を共にした際に、話題になったのが「幸福観」であった。日本を何度も訪れたことがある彼は、ブータンは貧しいが、日本より幸福だという。二〇〇五年の国勢調査の際に「国民の97%が『幸せ』と答えた」という。

そう、グロス・ナショナル・ハピネス(国民総幸福略してGNH)を、ブータンは掲げているのである。第四代国王が一九七六年に、「GNHはGDP(国内総生産)よりも重要である」と言い始め、いまや世界に知られるキャッチフレーズとなった。

まことに結構な、国のあり方のようにおもえる。短期間の滞在なので、私にはそれらを確かめるすべもなかったが、その雰囲気のようなものを感じることはあった。それは、人々の暮らしに不安といったものがない、ようにみうけられたからでもある。

まあ、のんびりしていること。首都ティンプーのたった一軒のスーパーがそうだったように、店のレジの女性は商売つけがまったくない。そんな例は、たくさんあったが、これは労働強度というものが低いということなのだろうか。のんびりしているということは。そのことが、幸福や幸せを感じることにつながっているのかもしれない。

これらの背景には、人口が少なく、それほど豊かでないが、貧富の差が小さいということもあるのだろう。そして、宗教、つまりチベット仏教の存在が大きいのだと、当然のようにかんがえたのである。人々の暮ら

しのなかにまで、仏教が拠り所になっているのだろう、と。



会場には所内外から多くの方々が参集しました。外国からはインド4人、中国1人、エチオピア1人、ペルー1人の計7人でした。



奥宮先生がプレゼンテーションしている様子です。

■ 統括班 ■ 野瀬光弘(総合地球環境学研究所) 第1回高所プロジェクト国際会議報告

◆ 概要

2009年12月3日(木)と4日(金)に、総合地球環境学研究所講演室において第1回高所プロジェクト国際会議を開催しました。会議のタイトルは、「高地適応と変化するライフスタイルの不調和としての疾病と老化("Global Environmental Issue in the human body -Disease and aging manifested by the imbalance between high-altitude adaptation and recent life-style change-")」です。

以下ではごく簡単に内容を紹介します(写真撮影はいずれも小林尚礼氏)。

◆ 12月3日(木)

立本所長から開会の挨拶をしていただきました。



インド・ラダック地方から参加したソナム・ジョルゲスさん(ラダック山地開発自治評議会事務局)がプレゼンテーションをしています。ウェブサイトを見ると、この組織は独自の予算が配分され、教科書選定など限定的な自治が認められているとのこと。

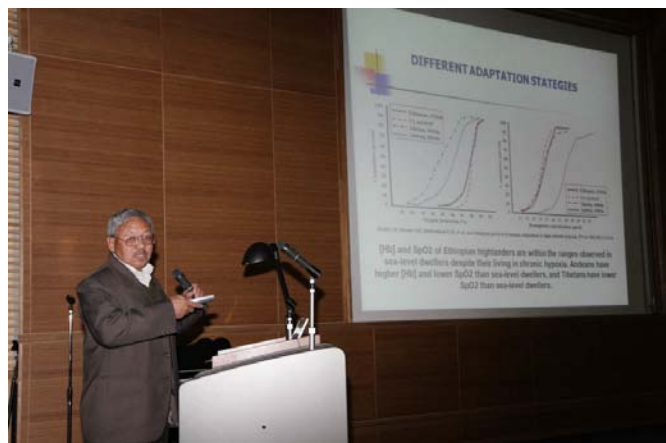


夜には外国からの参加者が宿泊していたホテルで歓迎会を開催しました。宗教関係などで特定の食べ物が摂取できない人がいなかったため、食事の注文に困ることはありませんでした。



◆12月4日（金）

2日目も国内外の参加者からのプレゼンテーションが行われました。カウンターパートのノルブー先生（ラダック予防医学研究所）です。ラダック地方における医学調査がうまく実施できている背景には、先生の「人徳」があるのだろうと考えています。



フロアからも意見が述べられ、活発な議論が繰り広げられました（発言者は中国の青海省から参加したゲリリ先生）。



会議が終わってから全員で講演室内のスクリーンを背景に集合写真を撮影しました。こぢんまりとしていますが、多くの方々が参加して下さった様子がうかがえると思います。



◆おわりに

主催者側の一員として、国際会議の運営に関わったのですが、プロジェクトメンバーの方々や学生さんの多大な協力のおかげでどうにか無事にできました。特に、ビザが必要な国からの参加者が多く、中には初海外という人もいて、本当に来日されるかと心中ヒヤヒヤしました。今回のような場を設定できましたので、各地域で今後調査・研究を進めていく上で重要な足がかりが得られました。みなさま、本当にありがとうございました。